

『徒然草』の研究—第二〇段について—

● 土 屋 博 映

一、はじめに

『徒然草』は序段プラス243段からなる随筆文学だが、もともと作者がそのように分けていたのではない。後人が、といっても江戸時代の人物だが、読みやすさを考えて現在のような章段に分けたものである。いつの間にか、それが既成事実となってしまった。ある意味では便利なのだが、その便利さが、作品の本質を覆い隠してしまうという危険性を生んだ。段区分は前後の流れを遮断する。本来は、該当する章段の前後の章段を組み込まないと、作品の真意が読み取れないだが、段区分が障害となり、本質が見えなくなってしまう。本稿でも、そういった段区分の障害のみられる章段を取り上げ、より正当な解釈を追求するとともに、段区分の弊害を論証し、かつ本作品の再編成を訴えてみたいと考えるのである。

本稿で取り上げるのは、第二〇段だが、続く第二一段との親近性、さらには前の第一九段との関連を論じ、第二〇段の本来の価値を見いだしていきたいと考えている

二、第二〇段

1、全文

なにがしとかや言ひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。(本文は、『日本古典文学全集』(小学館)による。以下同じ。また、以下『日本古典文学全集』を『全集』と呼ぶ)^(註1)

2、検討

まず「なにがしとかや言ひし世捨て人の」について。「世捨て人」は、本書中、他に一例のみ、第一段に、「ひたぶるの世捨て人はなかなかあらまほしきかたもありなん」(傍線部筆者による。以下同じ)と存在している。この第一段の「世捨て人」は、「うらやましからぬ法師」に対して、好意的にとらえられた存在である。これを応用すれば、本段に「世捨て人」が主体となっているのは、続く逸話が作者にとって望ましいものである、ということに他ならない。しかも「し」という助動詞が用いられているのだから、「なにがしとかや」とぼかしてはいても、実際に作者が話を聞いたわけで、意図的に名前を記さなかったわけである。ここには事実をありのままのべようとする「記録」とかは異なり、「随筆(エッセイ)」として描こうとする作者の発想がうかがえる。

次に「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」について。「ほだし」とは、「自由を束縛する諸縁」と『全集』注にある。前記、「世捨て人」とは字面どおり受け取るなら、「俗世間」を捨て去った「人」である。だから「この世のほだし持たらぬ身」となる。

好意的に取り扱う方向性をもった「世捨て人」が発言した「ただ空の名残のみぞ惜しき」とは

作者にとって同感させられる内容だったのは当然である。ここで、「空」とは、「普通、自然環境の意にとられるが、文字どおり空と解釈する説もある。」と『全集』注にある。

「空」とは「普通、自然環境の意」と言う見解は、我々現代人の常識としてはありえないだろう。「空」は「空」であり「スカイ」である。これについては、『諸注集成』^(註2)には次のように記されている。

佐藤春夫氏の口訳には、「空の見納めが心残りである。」とある。空を「先段の四季折々の天の事（貞徳説という。）」とすれば、「雪月花の折々の空のけしき（文段抄）」と解される。「美しい空との別れ（川瀬 西尾）」はこの説によるものである。このA説は、佐野説に破られているものであり、B説、佐野説では、沼波説の「時候の別れ」を敷衍して、「四季の変化につれて、花鳥風月の趣も次第に移り変わって行く、それに対する惜別の情である。」とされる。「空」は必ずしも、四季折々の空（慰草）ではなく、移り変る自然の景趣の総括とみる（塚本、今泉、佐成、浅尾、保坂、前嶋、平尾）。方丈記に「生涯の望みは、折々の美景に残れり」というのがこれである（山田）。C説、さらにこれに焦点を与え具体化して、「月」とするのには、藤田、富倉説がある。「やさしくいえば、これは月のことである（類纂評釈）。心敬の「ひとりごと」に、「いにしへの歌仙二人、この世の事をむつ物語（親しく語る）せしに、ひとりは世になごりの惜しく侍るは、空のみなりといふ。月に別れん事也。」とあって、さらに「ひとりは世には露のみ心とどまり侍る。露をいまだ見残し侍ると語るとなり。あはれなりし。げにもいかなる岩木の心にか、月を縁に、露をはかなく見侍らざらん」とある。これは次段にもかかわりをもつ同感の語とみられるのであり、自然の風物とか、空の景色とか解せられているのは不当であるとするのである。金沢文庫の書簡に「年月はへだたり候へども、この月は空の気色もわすられ候はず」とあるのも、月をさしているのであろう。前段に「二十日あまりの空」「年の名残り」「あけゆく空のけしき」という語句がある。この前段を流れている意識はここにつながっているものと思われる。第十九、二十、二十一の三段は、連続したものとしてみるのが妥当であろう。さすれば、ここにいう「空」は、普通にいう「空」という意味でさしつかえないともいえるであろう。（『諸注集成』による）

ここで、「空」について、様々な論が述べられているが、何とも「空論」まさに「空論」としか言えないような説が多い。最後の傍線部に述べられている内容が、簡潔、明快で、筆者も賛同したいところである。本稿で筆者の言わんとするところのほとんどは、この傍線部でつきていると言っても過言ではない。

「第十九」段は、長文である。一応第一九段の概要をまとめておく。第一九段は、本稿で取り扱う「第二十」段の前におかれているので、以下「前章段」と呼ぶことにする。

前章段は冒頭が「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」で始まる。つまり「季節の移りかわるさまは、なにごとにつけても情趣深いものである」（『全集』訳）という内容で、季節の移り変わりの様子が主題となっている。

続いて『もののあはれは秋こそまされ』と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春の気色にこそあめれ」と記している。古来より「春秋の優劣」は論じられてきたところであるが、一般的に平安貴族は「秋」に「もののあはれ」を感じて、それを究極の美ととらえていたことが言える。

それをふまえて、作者は、「秋」に対して、「春」のほうが「今一きは心もうきたつ」と評価する。以下、春の美の項目として、「鳥(の声)」、「草」、「霞」、「花」、「花橘」、「梅」、「山吹」、「藤」

などが列挙され、「すべて、思ひ捨てがたきこと多し」としてまとめられている。以上の項目の中で、もっとも叙述が長いのが「花」（桜）であり、作者の「花」への思い入れが感じられる。

続いて、「夏」とは記さないのだが、夏の美の項目が列挙される。四月は「灌仏の比」、「祭りの比」、「若葉」など。「五月」は「あやめ」、「早苗」、「水鶏」など。「六月」は「夕顔」、「蚊遣り火」、「六月祓」など。

続いて、「秋」とは記さないのだが、秋の美の項目が列挙される。七月は、「七夕」、「雁」、「萩」、「わさ田」、「野分（の朝）」など。秋は思いのほか記述が少ない。この点にも季節に対する作者独自の嗜好が感じ取れる。

以上を記したのち、作者は「言ひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど」と言い訳めいた叙述をし、いったんまとめに入る。この「いったん」の「まとめ」は看過できない。何故なら、続いて叙述される、冬は特別扱いと言うことになるからである。

そこから「さて冬枯の気色こそ秋にはをさをさおとるまじけれ」と一転して「冬（枯の気色）」が「秋」にはそうそうおとるはずがない、と冬の魅力に転じていく。冬の美の項目は、「紅葉」（秋から散り残っている、冬の世界の中の「紅葉」ということ）、「霜」、「年の暮れ（はてて、人ごとに急ぎあへる比）」、「月（の、寒けく澄める廿日あまりの空）」、「御仏名」、「荷前の使」、「公事ども（しげく）」、「追儺」、「四方拝」、「つごもりの夜」、「年の名残」と続く。

その後、前述した、『諸注集成』で傍線を引いた部分が記されることになる。以下、再掲する。

「暁がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心ぼそけれ。（中略）かくて明けゆく空の気色、昨日に変わるとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたしてはなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ」

ここに「年の名残」「空の気色」とある表現が、本段に関連するのではないか、というのが『諸注』の見解である。

本稿では主として触れるわけではないが、ここで、第一九段について一応の見解を示しておく。冒頭の一文（主題）にあるごとく、まさに「折節のうつりかはる」ところに、美を見いだしているのである。その中でも「冬」の記述がもっとも長く、詳細で、かつ「春」「夏」「秋」までとは別世界として描いているところが重要である。つまり「春」「夏」「秋」は、作者の言葉を借りれば、「みな源氏物語、枕草子などにことふり」されているわけで、「人の見るべきにもあらず」という自らの表現への評価である。表面的には謙遜と取られるようだが、案外本音かもしれない。注意しておきたい。

言うならば、作者が第一九段でもっとも強調したかったのは「冬」ということになるのである。したがって、繰り返すことになるが、冬にこそ、作者の独自性があるということ、つまり第一九段の主眼ということになる。

「冬」とはいうが、本文に「公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて催しおこなはるるさまぞいみじきや」とあるごとく、まずは大晦日に記述が集中し、さらに「かくて明けゆく空の気色」とあるように、実際には「春」にあたる元旦の様子でまとめているわけである。作者にとって「折節のうつりかはる」のは「ものごとにあはれなれ」であったが、とくに年末（冬）から年始（春）への変化に感動と美を見いだしていたということになる。

年末のポイントが「年の名残も心ぼそけれ」であり、年始のポイントが「明けゆく空の気色」

であると考えてみたらどうか。

この第一九段を記したことを受けて、第二〇段が記述されたと考えること、つまり前章段の末尾が本段を記述した原因となっているということは相当の可能性をもって言えそうなのである。

実は、第一九段には次のような記述がある。

「灌仏の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。

これと、本段、第二〇段を比較してみよう。再掲する。

なにがしとかや言ひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

前者（第一九段）では、「人」の「おおせられし」ことについて、「げにさるものなれ」と評価し、後者（第二〇段）では、「世捨て人」の「言ひし」ことについて、「誠にさも覚えぬべけれ」と評価している。敬語の存在から、前者の「人」は、貴人である。この二例を比べると、傍線部の存在により、「世捨て人」の発言に、作者が、より同調しているということが言えるとともに、前章段（第一九段）と本段は相当な関わりがあると、推定されるのである。

次章では第二一段（後章段）の検討をする。

三、第二一段

1、全文

万のことは、月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかり面白きものはあらじ」と言ひしに、又ひとり、「露こそあはれなれ」と争ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月・花はさらなり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水の気色こそ、時をもわかずめでたけれ。「沉・湘日夜、東に流れ去る。愁人の為にとどまること少時もせず」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。嵇康も、「山沢に遊びて、魚鳥を見れば心楽しむ」と言へり。人遠く、水・草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ。

2、検討

本段（後章段）は、一般に、二段落に分けられる。前段落冒頭の一文の「万のことは、月見るにこそ慰むものなれ」が本段の主題となるものである。これが、後半の段の末尾「人遠く、水・草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ」と呼応している。

これらから、後段の「慰む」が本段のキーワードに当たるということは一目瞭然である。この「慰む」は、第一二段に「同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそ、うれしかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひるたらんは、ただひとりあるここちやせん」とあり、さらに「『さるから、さぞ』ともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごとと言はんほどこそあらめ、まめやかかの心のともには、はるかにへだたる所のあ

りぬべきぞ、わびしきや」などともある。続く第一三段には、「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる」ともある。

とくに「つれづれ慰ま(め)」と表現されているのには注目したい。ここで想起されるのは序段である。本書の冒頭の序段は「つれづれ」から始まり、本書の名称の由来にもなっている。これらの例から、作者は、人とのやりとりでは「つれづれ」は「慰め」られず、書物と向き合うことによって、それが可能となるという考えであることがわかる。

それらをふまえて、本段冒頭の一文を考えてみる。「万のことは、月見るにこそ、慰むものなれ」は、序段から続いてきた、作者のもやもやした「つれづれ」な気持ちだが、一旦は「書物」により解消されたのだが、ここにきて「月見る」ことで解消されるという見解にいたった。本稿では、第二〇段を中心に、第一九段(前章段)と第二一段(後章段)の関連性を証明するのが目的だが、どうやら作者は、当然のことであるかもしれないのだが、「つれづれ」というもやもやをかかえて、少なくとも第二一段まで連綿として書き続けてきたもののように思われる。

続いて、作者は、「ある人」の「月ばかり面白きものはあらじ」という意見に、「又ひとり」の「露こそあはれなれ」という反論を記している。そしてどちらが勝るかということはさておき、「折にふれば、何かはあはれならざらん」とまとめるのである。

このとき、「月」は「空」の代表として、「露」は「地」の代表として、とりあげられている。いずれも自然であり、「折にふれば」の一文を、前章段冒頭の「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」と比較すれば、この「折にふれば」と関連をもっていることが明らかである。

さらに「月・花はさらなり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水の気色こそ、時をもわかずめでたけれ」へと続く。「月」はそのままだが、「露」は「花」と置き換えられ、さらに「風」から「水」へと作者は自然を描写する。ここで「時をもわかず」には注目したい。これは第一九段冒頭の「折節のうつりかはる」と対照的な表現である。言ってみれば、「月・花・風・水」が、時の変化に無関係な究極の美ということになる。

続く「沉・湘日夜」と「山沢に」は漢籍からの引用である。これは作者の考えを、漢籍を利用して、自己の考えを補強する、当時常用の用法である。

そして後章段の結論は「人遠く、水・草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ」である。「人遠く」がこれまでの「慰む」キーワードであったが、ここに至り、「水・草清き所」に「さまよひありき」するのがいいという心境にいたった。人から離れ、書物を読むことから、美しい自然に囲まれることこそ、「つれづれ」のもやもやが解消されるというのが、ここまでに作者がたどり着いた心境なのである。

まさに本段(第二〇段)と、前章段(第一九段)後章段(第二一段)は一連の流れをもって連続しているのである。さらには序段からの、一貫した流れも見取れる。

四、結論

本稿は、『徒然草』第二〇段に注目し、前後の章段との、関連、位置づけを試みたものである。本段を再々掲する。

なにがしとかや言ひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

キーワードは①「世捨て人」、②「空の名残」、③「誠にさも覚えぬべけれ」の三つであった。

①については本書中、他に一例、第一段に、「ひたぶるの世捨て人はなかなかあらまほしきかたもありなん」とあり、作者にとっては好意的な対象であることがわかる。したがって、「この世の」以下の発言は作者にとって好ましいものであったと考えられた。

②「空の名残」の「空」と「名残」の二つがそれぞれポイントとなる。「空」は、前章段末尾部分に「かくて明けゆく空の気色」と、正月の「空」の様子について述べられた部分との関連があると思われる。また「名残」は、同じく前章段の後半に「年の名残も心細けれ」とあり、これも「空」と同様、本段との関連があると考えられた。

③の「誠にさも覚えぬべけれ」については、前章段の前半に、類似の表現が見られた。以下、再掲する。

「灌仏の比、祭の比、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。

この③は、この傍線部分「げにさるものなれ」の内容を強調したものと考えられる。

以上三つのキーワードは、いずれも前章段（第一九段）との関連で記されていると見られ、本段は前章段との関連が強く、前章段との一連の流れの中で記されたものと判断した。

次に、後章段（第二一段）との関連であるが、後章段冒頭の「万のことは、月見るにこそ慰むものなれ」の「月」は一連の流れの「空」からの連想であり、さらにそこから、「露」「花」「風」「水（魚鳥）」「草」などの自然美の列挙へと続くのである。

振り返ってみれば、前章段の冒頭は「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」であった。つまり前章段のテーマは、①「折節のうつりかはるこそ」という、「季節の移り変わり」を、②「ものごとにあはれなれ」という、「なにごとにつけても趣深い」という意味でまとめられていた。この流れが本段を生み、後章段へと続いたわけである。

後章段冒頭の一文「万のことは、月見るにこそ慰むものなれ」は、まさに前章段冒頭一文「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ」を受けているということなのである。後章段の前半に存在する「折にふれば、何かはあはれならざらん」は、前章段冒頭の一文を言い換えたものであるということになる。

実に前章段（第一九段）冒頭からの作者の「折節のうつりかはる」美の主張は、本段（第二〇段）を重要な根拠として、後章段（第二一段）でまとめられていたのである。それが後章段末尾の、「人遠く、水・草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ」という最終結論へと続き、彼の自然美がまとめられるに至ったのだ。

作者の自然美は、最終的に、漢籍を引用し、「花鳥風月」という中国から伝来の美観を受け、「人遠く」と、「さまよひありき」という要素を加えて、「心慰む」という究極の感動の境地を導いたというわけである。

（注1）本稿の本文は、『日本古典文学全集』（小学館）に寄った。

（注2）「諸注」については、『徒然草諸注集成』（右文書院）に寄った。